

寛学事始かんがくことはじめ（菊池寛に学ぼう）

「らんがくことはじめ蘭学事始」は、「かいたいしんしよ解体新書」を著した杉田玄白が当時のいきさつを回顧した書として知られていますが、同名の短編小説が菊池寛にあります。オランダ語で書かれた医学の本「ターヘル・アナトミア」を手に入れた杉田玄白が、同じくこの本を持つ前野良沢との心の葛藤を持ちながら、ふわ腑分けに立ち会い、その記述の正確さに驚嘆し、苦勞をして日本語に訳し、「解体新書」を完成させていく様子を描いた作品です。

菊池寛は、ご承知のとおり、大正から昭和初期にかけて活躍した高松市出身の文壇の大御所です。数多くの優れた文学作品を著すとともに、文藝春秋社を起こした実業家であり、芥川賞、直木賞を創設した人としても知られています。

そんな郷土の生んだ偉人である菊池寛の生い立ちや人となり、また、文学作品を、小中学生にも直接触れて学んでもらおうと、松平公益会のご支援を得て、今年度から「かんがく寛学」と銘打った本市独自の事業を実施します。小中学生が菊池寛の生き方に触れたり、作品を読んだりする活動を通して、先人を誇りとして感じるとともに、自己の生き方を考え、夢を育み、高い志を持つことができる。また、多様な表現を学び、自己の表現力を高めようとする意欲や意識を持つことができる、といった教育効果を期待しています。小学校の作品集には、菊池寛の児童文学作品の中から「オオカミと牡牛との戦」や「良い熊、悪い人間」、「本当のロビンソン」など感動が伝わる作品を、中学校では、冒頭記した「蘭学事始」をはじめ、代表作である「父帰る」や「恩讐の彼方に」などを選定しています。

菊池寛は、若い頃から大変な読書家でした。自叙伝の中でも『私の中学校時代に、もっとも有がたい事は高松に図書館が出来たことである。』として、『私は一日として図書館に通はないことはなかった。蔵書は二万余冊だったが、その中で少しでも興味のあるものはみんな借りたと云ってもよかった』（※）と書いているほどです。

そんな文学作品のみならず、人物としても大変魅力的な菊池寛をもっと学ぼうと、いわば「寛学事始」を行うのです。子どもたちの生きる力を高める一助になることを願っています。

（※）「半自叙伝」菊池寛著（岩波文庫）